



22:30 翌日、千人隊長は、パウロがなぜユダヤ人たちに訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を解いた。そして、祭司長たちと最高法院全体に集まるように命じ、パウロを連れて行って、彼らの前に立たせた。

23:1 パウロは、最高法院の人々を見つめて言った。「兄弟たち。私は今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました。」

23:2 すると、大祭司アナニアは、パウロのそばに立っていた者たちに、彼の口を打つように命じた。

23:3 そこで、パウロはアナニアに向かって言った。「白く塗った壁よ、神があなたを打たれる。あなたは、律法にしたがって私をさばく座に着いていながら、律法に背いて私を打てと命じるのか。」

23:4 すると、そばに立っていた者たちが「あなたは神の大祭司をののしるのか」と言ったので、

23:5 パウロは答えた。「兄弟たち。私は彼が大祭司だとは知らなかった。確かに、『あなたの民の指導者を悪く言うてはならない』と書かれています。」

23:6 パウロは、彼らの一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人であるのを見てとって、最高法院の中でこう叫んだ。「兄弟たち、私はパリサイ人です。パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。」

23:7 パウロがこう言うと、パリサイ人とサドカイ人の間に論争が起こり、最高法院は二つ

に割れた。

23:8 サドカイ人は復活も御使いも霊もないと言い、パリサイ人はいずれも認めているからである。

23:9 騒ぎは大きくなった。そして、パリサイ派の律法学者たちが何人か立ち上がり、激しく論じ、「この人には何の悪い点も見られない。もしかしたら、霊か御使いが彼に語りかけたのかもしれない」と言った。

23:10 論争がますます激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと恐れた。それで兵士たちに、降りて行ってパウロを彼らの中から引っ張り出し、兵営に連れて行くように命じた。

23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた。

エルサレムでは苦難が待ち受けているということ、パウロも周囲も知っていました。しかし、異邦人の救いと割礼のことなど、そしてパウロが書簡に記したような教理的なことなどを、エルサレムの教会指導者たちと一致させなければなりませんでした。

パウロは1人でも行動する信念の人でしたが、独善的な孤高の人ではなく、交わりと協力のひとでもあったのです。それは教会がキリストの体であるという主の示しから来たものでしょう。エルサレムでの活動は、無鉄砲ではなく主の必然であったのです。

また彼はそのために自分の不利益を厭（いと）いませんでした。私たちはときには、主からのアイデアや計画を知っているながら、自分に役目が

回って来そうになると、消極的になったり意見を控えたりすることはないでしょうか。パウロが命をかけたことを思えば、役割を担うことを避けないようにしたいものです。

パウロはカイサルに申告するためにローマに行くことを願っていました。そのためにはエルサレムの法廷で結審してしまわないようにしなければなりません。その微妙な振る舞いをおそらく聖霊に導かれて、なすことができました。すなわちパリサイ人とサドカイ人の違いを衝（つ）いたのです。

このように主のご計画に進むなら、自分の思いもよらない摂理とともに、自分自身の知恵をも用いることができます。知恵をきよいものにしていただきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

